

「聖靈に満たされるととは？」

エペソ人への手紙 5 : 17-21

May.4.2025

エペソ人への手紙 5 : 17-21 (パワポ)

Preface

19世紀の南アフリカ共和国の神学者アンドリュー・マーレーという方が、その著書の中で、「私が死んだ時、聖靈が生きる。自我に死んだ時、聖靈が生きる」という言葉を残しました。

エペソ書の著者使徒パウロは、コリント人への手紙第一で、「私は日々死んでいるのです」(Iコリント15:31)と告白しています。

そして、今読みましたエペソ書5:17以降6章にかけて書かれている内容を見ますと、「聖靈に満たされる」とは、「自分に死に人を立てる」、「自我を殺し人を立てる」、「人の益のために自分を下ろす」、「自分を否定して、他者を尊重する」靈的戦いなんだ」と語り掛けられているように感じます。

主イエス様がマタイの福音書16:24節で、「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と弟子のペテロを叱責した後、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分に死に、わたしに従ってきなさい」と語り掛けられましたが、そのイエス様の語り掛けと全く同じような内容を、言葉を変えて使徒パウロ先生が語っておられるのが、このエペソ書5:17節以降の聖靈の満たしの内容だと思います。

意外にも、このエペソ書で語られている「聖靈に満たされる」というのは、その言葉から連想されるような、何かこう特別なと言いましょうか、摩訶不思議な宗教的スピリチュアル体験のようなものとは一線を画するかのようです。

夫と妻の関係・夫婦生活とか、親と子のやり取り・親子関係とか、部下や後輩等の自分よりも目下の人に対する振る舞いや姿勢、上司や先輩等の目上の人に対する態度などの職場や社会における人間関係という、至って実生活に則した生々しい人と人との繋がりや日常のやり取りの中に現れるもの、表すものが、「聖靈に満たされることだ」と説いています。

Part One

以前にもお話ししたことがあると思いますが、私は大学生の頃、所謂と言いましょうか、聖靈に満たされるという言葉から連想される摩訶不思議な宗教的スピリチュアル体験のような体験をしたことがあります。

イエス様の弟子たちに聖靈が臨んで下さって、突然外国語で福音を語ったような、モーセ以外の70人の長老たちに神の靈が与えられて、恍惚状態で神の国のことを語り始めたような不思議な聖靈体験をしたことがあります。

アメリカでのことですが、私が信仰を与えられたサンディエゴカルバリー教会の2泊3日の青年修養会に参加した時のことでした。

旧約聖書に書いてあるような、頭に油を注ぎながら祈るということを2日目の夜のプログラムの中で行いました。

牧師が青年たちの頭から全身にかけて油を注ぎながら祈るんです。

その時の牧師が、ポール・キム先生と奥様のサラ先生でした。

賛美チームが賛美を歌っている中、ポール先生とサラ先生が、私の頭の上に手を置いて祈って下さりながら、たっぷりのオリーブオイルを頭からかけて下さいました。

すると突然、私自身本当にびっくりしましたが、体がぶるぶる震えながら立っていられなくなり、後ろに仰向けに倒れてしまいました。

そして、口から突如として異言が出て来て、その異言で祈り始めるんです。

起き上がるうとしても、起き上がれません。

でも心も体も、平安でいっぱいなんです。

気分がめちゃめちゃいいんです。

その様子を少し離れたところで祈りながら見守っていた一人の青年が、後になつて話してくれたのですが、白い衣をお召しになったイエス様がその周りを歩いておられるのを見たと言うんです。

もうびっくりですね。

その体験を通して、それ以降、私自身、主イエス・キリストの存在を、聖靈なる神様の存在を否定することが出来なくなりました。

その時、私自身の生きる道を決心したように思います。

「見ても信じようとしない疑い深いトマスのような私に、消すことの出来ない記憶として、神のご臨在を動的に、神が本当にいらっしゃるということを、イエス様が、聖靈様が神であられることをこの身をもって知れるようにして下さったんだ」と思いました。

そして今でも、その時の体験を感謝しています。

こういうちょっと不思議な靈的体験のような聖靈の満たしについても、聖書は記録していますが、実のところそれ以上にはるかに多いのが、至って普通の平々凡々な日々の暮らしの中に現れる品性としての、品行としての聖靈の満たしです。

至って実生活に則した生々しい人と人との繋がりややり取り、人に対する態度や振る舞いに現れる聖靈の満たしです。

むしろ、この聖靈の満たしの方がメインであり、聖書が重きを置いている聖靈の満たしだと思います。

Part Two

例えば、モーセという方。

「海を割った」とか、「岩から水が出るようにした」なんていうことは、長

いその人生の中にあって、ほんの一瞬の出来事でした。

もちろん、それらの事件も決して忘れることの出来ない、忘れてはならない重要な靈的転機ではあったという事実に搖るぎありませんが、その信仰者としての歩みのほとんどすべてが、生々しい荒野という人生の現場において人々とともに色々なやり取り行き交いをしながら生きるというその人間関係の中に表す、現れる聖靈の満たしでした。

神の靈に満たされることを、自分以外の他者との人間関係の中に体現したということです。

一例として、民数記14章に行ってみましょうか。

民数記14：1－5（パワポ）

モーセとアロンは、イスラエルの全会衆に対して何も悪いことはしていませんでした。

なのに逆に、イスラエルの全会衆は、「約束の地になんか行ってたまるか！お前たち二人は、純朴な私たちを騙してこの荒野へと連れ出して、野垂れ死にさせようとしている！」と、訳の分からぬ、つじつまの合わない、何の根拠もない逆恨みをしながら、モーセとアロンを打ち取る勢いで迫って行きました。

すると、モーセとアロンは、「あなたがたは、なに訳の分からぬ強情を張りながら、私たちを困らせるのか！」と言い返すこともなく、ただ彼らの前にひれ伏しました。

神を恐れて、「神の前にあってやましいことなんか一つも無い」なんてことは決して言えないということを、全身をもって言い表すかのように、自分に死に、自らを下ろして、自分を否定して、理不尽な筋の通らない人々の前にひれ伏すということをもって、神の靈に満たされていることを謙遜に表しました。

後ほど見たいと思っていますが、ローマ書12章にありますように、「靈に燃え、主に仕えるように、相手をすぐれた者として尊敬しなさい。出来る限り、全ての人と平和を保ちなさい。自分で復讐してはいけません。神の怒りに委ねなさい」という御言葉通りに、聖靈の満たしをその生々しい人生の現場・人間関係において体現しました。

正しいか間違っているかの戦いではなく、どれほどに自分を主なる神様の前にあって、とんでもない者なんだということを認識出来るのどうかの戦いです。

ただただ、受けるに値しないにも関わらず、受けている神の恵みがどれほどに大きいのかを悟れているのかいないのかの戦いです。

本当に、キリストの十字架とともに十字架につけられた罪深い罪人なんだということを根深く知っているのか知っていないのかの戦いです。

私は死んで、キリストが我が内に住んでいるというところに留まろうとしているのかしていないのかの戦いです。

もっと平たく言いますと、神を知っているのか知っていないのか、キリスト

を信じているのか信じていないのかの戦いです。

イスラエルの全会衆は、戦い相手が目の前にいる人でした。
その人をやっつける、見下す、裁くことを戦いとしていました。
でも、モーセとアロンは、神の前にあって、イエス・キリストを前にして、
「自分という人はどうなのか、何なのか？」という戦いをしました。
そして、それをもって、聖霊の満たしを表しました。

また、膨大な賛美とメシア・キリストの誕生を神の言葉として書き残したダビデという方も、ゴリアテを倒したとか、所謂魔訶不思議な聖霊の満たし体験などは、その長い信仰者としての歩みにおいてほんの一瞬の出来事で、そのほとんどが、生々しい人とのやり取りや繋がりの中で、聖霊の満たしを体現していました。

自身王としての権力を悪用して隠蔽しようとした大きな罪を、預言者ナタンに指摘された時には、跪いて衣を裂き、自らの罪を隠すことも言い訣することもなく、聖霊の促しに従って正直に認めました。

有り得ないようなとんだとばっちりとしか言いようのない、命を脅かすサウル王による酷い追跡にあっても、神を恐れて、その道理に合わない追跡者に対する慈悲、赦し、従うということを体現しようと努めました。

復讐は神に委ね、キリストに従うようにその人に従い、ただ神を待ち望みました。

さらには、自分の束ねる部下や兵士たちを道具のように見なすのではなく、一人格として、尊敬の念をもって、逆に仕えようと努めました。

そんなダビデの聖霊に満たされるということを、人との繋がりの中で表そうとしたダビデの姿や表情は、どんなだったのかなあと想像します。

Part Three

25年前、韓国語がほとんど出来ないにも関わらず、私が韓国の神学校に行こうと決めた時、いくつか候補の神学校があったのですが、合同神学大学院という神学校に決めた理由は、そこで教鞭を執っておられる先生方と学んでいる神学生の姿と表情でした。

当時お付き合いをしていた家内と、何のつても予約も無しで、候補に挙げていた神学校をいくつか訪問しながら、合同神学大学院に初めて行った時のことでした。

校内を二人でキヨロキヨロしながら、右往左往しながら、神学校の校舎らしきところに入りますと直ぐに、12, 3mぐらい離れたところでどうか、たまたまそこにスッと立っておられた一人の白髪の眼鏡をお掛けになったご年輩の方が、私たちを見るなり、それまで見たこともないようなと言っても言い過ぎではないくらいに、朗らかで、優しい静かな笑顔で、若造の私たちに向かっ

て会釈をして下さいました。

儒教文化の濃い韓国では、若輩者が目上の方だったり年上の方に、先に挨拶することは当たり前のことだと思いますが、明らかに自分たちよりも遙かに年上で目上の方が、私たちを見るなり先に、朗らかで優しい笑顔で頭を下げながらご挨拶をして下さったことに、家内と私はある意味ショックを受けました。

そして、そこで、二人で同時に思ったのが、「あ、この神学校は、何か違う」ということでした。

後に、その方が、どんな方なのかを知ってさらにびっくりしました。

プロテstant神学の礎を築いたとされるジョン・カルバンのキリスト教綱要という聖書よりも分厚い本があるのですが、そのキリスト教綱要を初めて韓国語に翻訳された著名な神学者であり、当時の神学校の総長・学長先生だったので。

また、後日アポイントを取って改めて神学校を訪問する際には、家内の実家近くに住んでおられたご年配の教会史の先生が、ご自分の車で私たちを迎えて下さり、学校まで乗せて行って下さいました。

私たち二人は、車の後部座席に座って、あまり言葉数の多くないその先生と、小さなバックミラー越しに二言三言言葉を交わすのですが、これまた朗らかで、お優しい目と、表情から滲み出る静かな輝きと、言葉の語調と言うのでしょうか、私たち若輩者に敬語で語り掛けて下さるその語り口から、また二人で思いました。

「あ、この神学校は、何か違う。」

そして学校に着いて、今度は、私たちを案内して下さるために待っていて下さった先輩の神学生の方のその先生に対するお仕えするような姿勢と、その神学生に対しても敬語をお使いになりながら、愛する息子を見るような目でお話ししているそのお二人のやり取りを見て、また、「あ、この神学校は、何か違う」と思われました。

「そんな神学校で、何を学んで、あなたはそんな姿なんだ」と問われますと、私自身何も言えませんが、その合同神学大学院で、3年間口酸っぱく教えられたのが、「聖霊の満たしは体験ではなく、生き様だ」ということでした。

正に、使徒パウロ先生が、このエペソ5章の後半部分から6章にかけて語つておられるその内容そのものです。

「主のみこころが何であるかを悟りなさい。御霊に満たされなさい。キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」

エペソ人への手紙5：17-21（パワポ）

17節で「主のみこころが何であるかを悟りなさい」と仰った後、18節で、

「主のみこころとは、聖靈に満たされることだ」と言わんばかりに、「聖靈に満たされなさい」と勧めながら、聖靈に満たされた結果がどこに表れるのかと言うと、「互いに従い合うこと」に表れると、21節で、「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」と命じて下さいます。

「人の力では、人は互いに従い合うことが出来ない」と言わんばかりに、「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」と言います。

キリストが、私たち罪人をお救いになるために、神であられる方が自らを低くして人間と同じようになられ、十字架の死にまで従われながら、「ご自分を殺し人を生かして下さったように」、「人のためにご自分を否定なさったように」、「ご自分のいのちよりも人々の存在をすぐれた者と思って下さったように」、「そんなキリストを恐れて、互いに従い合いなさい」と命じておられます。

「決して人は、倫理道徳的に、人道的に、道義的に、自らの力や、教養や、人生経験で、互いに従い合えるようなそんな生易しい存在ではない」ということが、この御言葉の内側に込められている内容・事実だと思います。

つまり、「人が互いに従い合う」のは、至って、聖靈のみわざでしかないとということですよね。

聖靈に満たされて、キリストを覚えながら、先に自らの罪深さを悟り認め告白し、それをもって初めて人は、自分に死に、人に従うことが出来るというのです。

なぜならば、先週見ましたように、神を裏切り、罪人に堕落した人類は、結果的に、内在して下さった神の靈を消してしまい、神とのハーモニー、人とのハーモニー、被造物とのハーモニーを壊してしまったからですね。

すべての関係を、創世記4章にありますように、「復讐」と「殺す」という品行によって物事回すようになってしまったからですよね。

そんな人類が今一度、「互いに従い合う」という人本来の姿を体現するためには、人本来の姿である、神の靈に再度満たされるという道しかありません。

そして、主の靈に満たされたならば、キリストに対する恐れが生じ、自分に死に、人に従っていける。

しかも、それが嫌々ではなく、喜びと平安と本質的な希望を抱きながら、そう出来るというのです。

思わず、顔に表れてしまう平安です。

Part Four

聖書が、先ず第一に私たちに教えてくれる人間像、人間觀とは、樂觀的な希望に満ち溢れている存在ではなく、「復讐」と「殺す」ということを動機に動いてしまっている罪深い罪人だということです。

そのためか、エペソ5：18で、聖靈に満たされることを、「満たします」とは言わず、「満たされなさい」と促すかのように、キリストを信じる私たち

側の努め、努力、選択、練習、行い、つまり意思が求められることを説いて下さっています。

聖書には、使徒の働き2章のように、私たち側の様相に関わらず、ただただ恵みによって満たして下さる受ける聖霊の満たしがあると同時に、私たち側の意志、決定、選択、姿勢、覚悟が問われる「満たされなさい」という、受けようとする、受けたいとこちら側の進んで望む聖霊の満たしの二通りがあるように思います。

そして、ここエペソ5章で語られている聖霊の満たしは、後者、つまり、私たち側の信仰が問われている受けたいという聖霊の満たしです。

使徒パウロがお書きになった新約聖書の半分を占める書簡を見ますと、キリストをかしらとする教会には、二種類のキリスト者が存在することを教えて下さいます。

一つは、長い間イエス様を信じて生きては来たけれども、依然として、固い食物は食べようとしないお乳ばかりを欲している幼子のような信仰にとどまっているキリスト者。

もう一つは、聖霊様の導き、聖霊様の完全な支配下に自分を明け渡し、お委ねすることをもって、靈的戦いに焦点を当てながら生きようとしているキリスト者。

私たちは、この二つの部類のどちらに属すのかを自らの意志をもって決めていかなければならぬでしょう。

それが、「御靈で満たします」ではなく、「御靈に満たされなさい」という勧め、促しの言葉に込められている神からの期待、要求、命令だと思います。

ではなぜ、神はそう要求されるのか？

キリストを信じる者と神との関係は愛の関係であるためですね。

愛とは感情であるとともに、意志もある。

常に意思表示し、意志決定を期待されながら、その愛を確認し合うからですよね。

そのために私たちに与えられているのが、自由意志ですね。

神から、「ア・イ・シ・テ・イ・マ・ス」というようなプログラミングをされた存在ではないということです。

これが、動植物と人間との最も大きな、明らかな違いだと思います。

動植物たちは、神が創造された時、プログラミングした通りに、この被造世界の循環、秩序の中で、その場を守りながら生きています。

神に逆らう被造物は、人間以外存在しません。

人のみに自由意志が与えられて、その意志をもって神への愛を、信頼を、忠誠を、意志をもって表現出来る存在として造られました。

神の深い恵みに漕ぎ出し、謙遜に、自分に死に、愛する聖霊に属する人生を

生きるのか、または、続けて肉に属する人生を生きるのか？

キリストを恐れ、キリストの到底計り知ることの出来ない深く広く長く高い恵みを悟ろうと努め、認め、喜びと共に自分を殺し、人に従うことを選び取つて行くのか、はたまた、お乳ばかりを求めながら、自分を可愛がり、自分を立てるために、人を見下げ、人を理解しようとせず、人をさばき続けながら、キリストを知っている風のパリサイ人のような一宗教人と化すのか？

私たちは今、「聖靈に満たされなさい」というキリスト者としての意志決定を、神から求められています。

神や人や状況環境が、今私が置かれている抱いている問題・問題意識の根源ではなく、私が、私という人自身が、そのすべての問題・問題意識の根源であることを、キリストを恐れて、死ぬまで遙って認めること。

それが、私の内に住んで下さる聖靈を消してしまわないことであり、聖靈様が生き生きと生きて下さる、「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者はそれを見出すのです」というイエス様の仰る永遠のいのちを生きることを実感することでしょう。

「これを、あなたがたは選び取って行きなさい」と今、この御言葉を通して、私たちは神様から求められています。

Conclusion

最後に、ローマ書12章の御言葉を読んで終わりたいと思います。

ローマ人への手紙12：10-21（パワポ）

「靈に燃え、主に仕えるように、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合う」という善をもって悪に打ち勝つ勝利、聖靈の満たしを喜んで選び取って行き、従う者であるよう祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ5：18 c、21